

---

# とある無能の絶対回避(リターナー)

踊る肉団子甘酢和え

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある無能の絶対回避<sup>リターン</sup>

### 【Nコード】

N5503K

### 【作者名】

踊る肉団子甘酢和え

### 【あらすじ】

学園都市のレベル0能力者の武装集団【スキルアウト】

一言に【スキルアウト】と言ってもそれは総称でしかない。

この物語は数多に存在する非法組織の一つ【エスケープ】のリーダー【御画 天鎖】の物語である。

## 御画 天鎖の考察

学園都市。そこは科学的な方法により発現させられた多種多様な【異能の力】を持つ者達が暮らす巨大な一種の【箱庭】のような場所だ。

綺麗なお題目を掲げ、安全を唱い、安心を騙し取った先にある現実は何の事はない、よくある只の人体実験。

せめてもの救いは実験の被験者たる少年少女達に無自覚者が多い事か……………がそれも些細な違いでしかない。

結局は誰も逃げられないのだから……………。

そしてこの俺、御画<sup>おが</sup> 天鎖<sup>てんさ</sup>も哀れな犠牲者の一人に数えられる筈だった。

そう、【だった】だ。

何の因果か学園都市に放り込まれたまでは良かった。超能力つてのに憧れてもいた。まあ、そんな儂すぎる夢希望の木っ端微塵の塵芥最初のシステムスキャンの結果はレベル0……………詰まるところの無能力者（役立たず）だ。

別に腐っちゃいなかった……が、それも最初の三年間だけ。いい加減、親のデカすぎる期待とか周囲の生ぬるい視線とかが鬱陶しいくなり始めた頃には諦めが入っていた。

ちょうどその頃だったと思う、似たような境遇の奴らとツルみ出したのは。

最初はそこそこ楽しめたがしばらくして違和感を感じ始めた。違和感の正体は意外と直ぐに判った。

コイツらは諦めきってる。

俺も諦めちゃいたがコイツらほど全てを捨てちゃいねえ。

似たようなことを考えてるヤツは他にも居た。

かまざり  
鎌霧 須会

人望は無いが人脈はあるって変わり者だ。

俺はコイツに誘われてチームを立ち上げた。いや、気付いた時にはチームになってた。

【エスケープ】

それが俺達のチーム、俺が手に入れた【居場所】だった。

## 日常における活動記録

学園都市第7学区。ここには主に中学、高校などの中等教育機関が多く存在している。当然、それに伴い学生や教員たちの生活圏にもなっている為、様々な生活商店も立ち並んでいる。

そんな学園都市第7学区の中にあるとあるファミレス。24時間営業である事、学生寮やアパートの近くにある為、昼夜問わず多くの者が利用している。

そんなファミレス内の一角、店内最奥の窓から一番遠い席を不穏な空気を放つ男3人、女1人の4人組が陣取っていた。本来なら注文を伺いに行かなければならない女性店員もその余りにも不気味な雰囲気近づけずにいた。

「悪いがコレは譲れんな」

4人組の内の一人、全身黒尽くめの男が突き放すように呟いた。黒のスニーカー、黒皮のズボン、黒のシャツ、さらにフード付きの黒皮のロングコートと上から下まで全て黒で統一された奇妙な出で立ちの男だ。

いや、奇妙なのは男の姿ではなく、そんな姿でいる男の感性だろうか。なにしろ季節感がない。現在7月中旬、つまりは夏真っ盛りだ。

学園都市の夏は暑い。更に言うなら現在の時刻は午後1時を回ったところだ。この条件で外を歩けば瞬く間に熱中症に見舞われるだろう。

「ハッ！言ってる！少数派意見はいつの時代も切り捨てられるもん  
ナンだぜ？」

黒い男の呟きに応えたのは対面に座る金髪の男だ。こちらの男は青  
いラバーサンダル、群青色のダメージジーンズ、無地の半袖シャツ  
に袖なしのパーカーと云う出で立ちだ。

「デメエ……」

「ンだよ……」

緊迫した気配が満ちていき、ちょうどその時来店した学生客が店内  
に入る事すらなく退散して行く程の一触即発の空気が店全体に溢れ  
ていった。

睨み合う二人。だが剣呑な気配を放つ2人をよそに、残された2人  
の男女はまるで何事もないかのようにメニューを眺めている。彼等  
に取ってこのやり取りは日常の風景の一つでしかないだろう。

『バン!』つとテーブルを強く叩きつけ男2人が勢い良く立ち上がる。互いが互いの胸元に掴み掛かり怒声を上げる。

いい忘れていたがこの2人には共通点がある。自他共に認める共通点だが方向性が若干違っている。今回のもめ事の原因は【ソレ】であり、またこのような事は良くある出来事なのだ。

その2人の共通点、それは……………

「テメエ俺の【けもみみ(狐)】萌を全否定かゴラ!?!」

「馬鹿かテメエ!?!時代は【スク水(旧スク・白)】なんだよ!?!」

【変態】だと云うことである。

f i r s t e p i s o d e

日常における活動記録

「ちよとさあ……そんなことより本題に入らない？」

いい加減痺れを切らした2人の内、少女が横やりを入れてきた。金糸で見事な華や蝶の刺繍の入った真紅のチャイナを着た少女だった。

「そんなことじゃネエよ！重要なんだよ！」

声を揃えて異論を唱える2人を見て深い溜め息を吐く少女。

「てかお前もチャイナとか変だろ？」

「こんどは私の私服にケチつける気！？」

黒い男（変態）に私服を馬鹿にされて（八つ当たりされて）、少女が立ち上がった。向かい側に座っていた線の細い少年が肩を少しだけ震わせた。この少年は黒いズボンに白いカッターシャツといたって普通の学生服を着ている。ただし少年の傍らに置かれた黄色のNPCが静かに異彩を放っているのを女性店員は見逃していなかった。

「そうそう、だいたいチャイナはガキには似合わ『ゴギン』にぎゅ  
！？』『ドゴ』がはっ！？」

黒い男に同意を示そうとした青い男の顔面から鈍い音がしたかと思うと、後頭部が勢いよく背後の壁に叩きつけられた後、その場に崩れ落ち動かなくなった。見ると青い男の頭があった辺りに赤い少女の左拳が鎮座していた。黒い男と黄色の少年は瞬時に何が起こったのか理解した。

(今の裏拳なのか！？殆ど見えなかったぞ！！？)

(僕なんか気づいたらもう手があの位置だったよ！？)

2人はアイコンタクトで情報を共有しあう。実際男には【何か】が青い男の顔面に当たったとしか認識出来なかったし、少年に至ってはそもそも視認すら出来なかった。それだけのスピードを込められた拳だ。幾ら少女の細腕であつてもその破壊力は………物言わぬ青い男の姿が物語っているだろう。

「で？本題にはいつ入るのかな？」

少女は見惚れんばかりの輝かしい笑顔で男と少年に問いかけた。何も知らない者がこの場に居れば間違いなく目を奪われていたであろう笑顔に、2人は悪寒しか感じていなかった。未だ少女よりも頭一つ高い位置に鎮座し続けている岩のように握り固められた少女の左拳がその一端を担っているのは言うまでもないだろう。

あれから約10分後、何とか少女の怒りを宥めるコトに成功した2人は早速本題に入るコトにした。青い男は依然として沈黙していたが、再び少女の怒りに火が着いたら目も当てられない状況になりかねなかったので放置する事にした。

「今回の【依頼】は賭金の取り立てだね。なんでも負けが込んでるのに勝負し続けてるんで賭金の催促に行ったら逃げられたらしくてね、なかなか捕まえられないから僕らのトコに話しが来たみたいだよ。」

黄色のNPCのキーを叩きながら少年、【葵 竜胆】（あおいり んどろ）は【依頼】について説明を始めた。

「期限は一週間、報酬は回収出来た金額の30%だって……うわ、すげー」

「ん？どろし……おお！？」

NPCのディスプレイに映る情報に驚く竜胆。それに釣られて隣りに座っている黒い男、御画（おが） 天鎖（てんさ）もディスプレイを覗き込んだ。そこには回収する賭金の総額が映し出されていた。

「37万！？結構な額だなあ、てか負けすぎじゃね？」

「一回の負け分はそんなでも無いらしいよ？でも色々な賭けに手を出してたら積もり積もって……………て事らしい」

天鎖の驚愕と疑問に竜胆が答える。彼らは、ホームページ上に幾つか設置された(した)隠しリンク先に依頼専用の掲示板を設置している。普段はそこに書き込まれた様々な内容の依頼……とは名ばかりの何でも屋紛いの小遣い稼ぎをしている。が、それとは別に今回の様な灰色、もしくは完全な黒に属す裏の仕事も請け負っていた。

「じゃあ、今回は誰が行く？仕事の内容から見て2、3人位がいいと思うけど?」

赤い少女、紅林真樹くわばやしこころが先を促す。時折メニューに目を泳がせている所を見ると、どうやら話し合いに飽きてきたらしい。その様子を見た天鎖は隣に座る竜胆の肩を軽く叩いた。叩かれた竜胆はNPCを閉じると立ち上がって店員の居る方へと歩いていった。

「お前と竜胆、それに【アイツ】の3人で行ってくれ。須会すかいのヤツは見ての通り……………なんだ……………ちよっと立ち直れそうも無いだろうから……………なあ?」

と、天鎖は未だに微動だにしない青い男、鎌霧須会かまぎりすかいに視線を移す。その原因を作った張本人は、まるで道端に転がる石ころを見る様な

視線を向けると直ぐメニューへと向き直った。

「……………兎に角、だ。【アイツ】には連絡済みだ。放課後に合流して3人で行ってくれ」

天鎖はそれだけ言うと立ち上がり、コートの内ポケットから5千円札を取り出すとテーブルの上に置いた。

「話しはコレで終わりだ。とりあえず各自解散ってことで。あとこゝは俺の奢りだ。」

「天ちゃんどっか行くの?」

言うだけ言って立ち去ろうとする天鎖の背中に真樹が声をかける。

「……………あのな真樹…一応俺は年上なんだから【天ちゃん】は止めような?」

立ち止まり振り返った天鎖は諫める様に言った。が、諫められた真樹の方は……………

「大丈夫、私は気にしない」

天鎖はガツクリと肩を落とす。その時丁度こちらに戻ってくる途中だった竜胆の目には何故か誇らしげな真樹とうなだれる天鎖の背中が映っていた。

「……………何してるんですか？」

「…いや……………ちょっと…な」

力なく答える天鎖に首を傾げつつも、自分の席に戻る竜胆。天鎖はそれを見届けると、去り際に一言「ゲーセン」と言い残して店を後にした。

余談だがこの後、須会は深夜近くまで気を失っていた。目覚めた時の第一声は…

「チャイナ怖い」

だったそうなの。

## 幕間く対峙く

二人の男が睨み合う。片方は見る者に威圧感を与える風貌の大男、対峙するはどこか幼さの残るコートの男。彼らの周囲には無数の人々が気を失い倒れている。私服や制服の少年少女、ジャケット風紀委員やアンチスキルと多種多様な人々が残らず全て。

「……………一度だけ聞く、戻ってくる気はないか」

大男が口を開く。コートの男には、その声に静かな怒りが込められているのが分かった。

「…アンタには世話になった。結構楽しかったし、こんな事になったのも残念だと思ってる。けど……………」

コートの男は答える。ありったけの思いと誠意を込めて。

「やり方が気にいらねえ。アンタが私怨でこんな事やろうとしてるとは思ってたねえけどな、アンタの下のヤツらは違うかも知れないだろ。結局はどっちも一緒なんだよ、どちらか一方からの思いだけじゃ足りないんだ」

「……………」

大男は静かに目を閉じる。自身の想いは変わらない。相手の想いも変わらない。どこにも間違いはなく、かと言って正解もない。自身は力無き弱者の為に、相手は心なき弱者を止める為に。けれども…

……

「今、この時苦しんでいる者もいる。彼らの叫びを聞いてやる者が要るだろう」

だからこの想いは譲れない。

「ああ……アンタがどんな人なのかは分かってる。アンタの想いは否定しない。」

だからこの想いは譲らない。

「……いいだろう」

「…後悔すんなよ」

大男は演算銃器と呼ばれる学園都市謹製の特殊な銃器を構え、  
コー

スマートウェポン

トの男は両手に黒塗りの三段ロッドを構える。互いに譲れぬ想いを込めて、どこまでも真っ直ぐに。

「倒させてもらおう!!」

「アンタをぶっ飛ばす!!」

二人はここに決別した。



転がっていた空きビンを華麗に踏み後続を巻き込みながら派手に転んで、入り組んだ路地を先頭を走りつづける俺の背中を見失わない様に死に物狂いで追跡し続けてくる。まったくもってしつこい。15分位は追われ続けてんじゃないだろうか。

「アイツ一体何モンだ!？」

「ここら一带は入り組んでる上に袋小路も至る所にあるってのに一向に引つかかりやしねえ!」

なんて声が後ろから聞こえて来るがガン無視。んなモンに引つかかっていたまるかっの。ったく……面倒な事になった。ゲーセンの帰り道で偶々通り掛かったカツアゲの現場。二人組の不良に絡まれて学生鞆を抱えてうずくまっている学生。分かりやすぎる程のカツアゲ現場に遭遇した俺は、普段はスルーするところをハイスコア更新して機嫌が良かったからつい仏心を出してしまったのだがこれがマズかった。一人をソッコウ小突いて挑発、追つて来たところを俺様自慢の逃げ足でぶちぎる予定だったのだが付近に仲間が居たらしい、進行方向にこれまた分かりやすいほどの不良三人が現れて思わず路地に入ってしまった。右に左にと曲がり角が多い上に障害物も数え切れないほどある、思うようにスピードが出ずに振り切れずに今に至る。そんなこんなで15分、気がつけば追っ手は十数人に………つてオイ。

「ちょっと待てオイ!お前らさっきよりもかなり人数増えてないかコラ?！」

「ハッ!ビビったか!諦めてさっさと捕まった方が身のためだぞコラ!！」

モノローグに気を取られてるスキに一気に倍以上の数になってるだ

とお！？そついやあさつきケータイで連絡とってるヤツ居たなあ……。

「クソが…ますます面倒な事に……………ん？」

未だ路地を縦横無尽に爆走中。事態は全く持つて好転せず、それどころか悪化の一途を辿る始末。さてどうやって追っ手を振り切るかと思案していると思わぬモノが目に入ってきた。直進して通り過ぎた十字路、その過程で見えた右折した先にほんの僅かだったが目に映ったそれは路地の出口だった。無我夢中で走り続けている内にとこかの出口に着いたのだろう。普通の思考回路の持ち主なら今すぐ引き返すか遠回りでもしてもう一度さつきの十字路に戻りこの狭い路地から脱出するだろう。だろうのだが……………

「……………なんだ今の。完全にデッドゾーンじゃねーか」

話は変わるが俺にはちよつとした特技がある。生き物全般には必ず備わっている極々基本的な一種の予知に似た能力。まあ簡単に言うと俺は勘がいい。危険なんかを嗅ぎ分ける時なんかは特に……………。そう、さつきの出口。俺には煉獄の入口に見えた。チラッと見えただけだったがアレはヤバすぎる。どんくらいヤバいか分かり易く言うと、ナイフ一本持って飛んで来る核ミサイルに突っ込んで行く様なモンだ。

「だからってこのままじゃ遅かれ早かれ……………チツ、やってやろうじゃねーかっ！」

立ち止まる。振り返る。走り出す。敵は数十。道は一つ。前進は無謀。後退は無意味。

「ああ！？ついに諦める気になったか？」



「なにワケ分かんねえ事言つてやがるテメエ!!」

もー俺様涙目。そんなこんなでもう目前まで来ちまった。ヤッベえ  
帰らせてえ。でも帰る為にや前門の虎か後門の狼を相手取らなきゃな  
んねえ。最悪だ、最悪のいちに……………まだ1日終わってねえや。

「……………いつちよ越えてみつかよお!!」

そう《越える》だ。路地の出口のほんの少し手前に積み上げられた  
ビンケース、多分この付近に何かしらの店があるんだろう。

「ふっ……………はっ!」

ビンケースを踏み越え、高く跳躍する。路地の出口を越え、歩道の  
真上を飛び越え、道路に着地する。それは良い。道路に着地しても  
危険がない事は分かっていた。なら何に《核ミサイル》と形容する  
ほどの危機を、恐怖を、死線を感じ取ったのか。

「あア?」

思わず振り返る。そして……………そこに居た《ソイツ》と視線が交  
差する。

「なんだテメエはよオ……………近頃はアレかア?人様の頭上飛び越えんのが  
流行つてんのかア?」

白髪。白い肌。華奢な体。赤い瞳。学園都市ではあまり見掛けない  
《外》のブランドモノの服。

「そこどけガキイ！この……あぎ！？」

俺を追っていた不良達の一人、一番先頭を走っていたヤツが《ソイツ》を突き飛ばした……ハズだった。俺は見た。《ソイツ》は微動だにしていない。だというのに不良は吹き飛んだ。不可解だった。不良は《ソイツ》突き飛ばした、これはいい。走って勢いも付いていた、これもいい。たが吹き飛んだのは不良の方だった。1mや2mなんてもんじゃない。不良は裕に10m以上は吹き飛んでいる。しかもノーバウンドで、だ。

「お前………一体………」

後に続く不良達が路地の奥で立ち尽くしているのが見える。アイツ等も相当困惑しているらしい。だが、その困惑の原因たる当の本人の《ソイツ》は未だに俺を見ている。突き飛ばされたハズなのに、まるで《何も感じなかった》かの様に全く自身の背後に興味を向けていない。

「他人様に名前訊ねる時はテメエから名のソのが普通じゃねエのか、あア？」

「てん……さ。……俺は御画 天鎖……だ」

思わず答えた。弾みだった。そして気づいた。何も感じない。今、コイツに毛ほども危険を感じていない。

(そうゆう事が……)

俺が感じていた危険はコイツにじゃない。コイツに《ぶつかる》事に危険を感じていたんだ。どうゆう能力かは分からないがコイツは

能力者だ。

「ハ！素直だなアオイ。じゃあコツチも教えてやんよ。今丁度珍しくご機嫌なんぞなア」

そして《ソイツ》は言った。《ソイツ》の名前は……………。

「はっはっは。焼けたぞ、さあ食べ食べ」

俺は、今、最高に機嫌がいい。あの後、蜘蛛の子を散らす様に不良共が逃げて行き、俺は事なきを得た。ついでに新しいダチも出来て万々歳。上機嫌ついでに焼肉店に繰り出してお肉祭りに興じているしだいなのだ。……………なのだが。

「……………」

そんな俺とは対照的に頬杖をついて不機嫌そうな視線を俺に向けて対面に座っているニューフレンズ。

「んだよ。ここは俺の奢りだぜ？助けて貰った礼もあるから遠慮しないでガンガン食ってくれ」

「…テメエ…………オレが誰だか知らねエのか？」

白髪。白い肌。華奢な体。赤い瞳。数え切れないほど異能力者が存在する学園都市。「知ってるさ、学園都市超能力（レベル5）第一位、一方通行さんだろ？有名人だぜお前さん」  
アクセラレータ

「ンならよオ」

何故、と問いたいんだろう。

「テメエはスキルアウトなんだろオ…ンなら天敵だろオが」

学園都市に住む人間は4つのタイプに分ける事が出来る。夢を見る者、夢を追う者、夢に潰される者、そして夢を羨む者。基本的に俺達スキルアウトと呼ばれる連中の殆どは言うまでもなく夢を羨む者だ。稀に、夢に潰される者も居たりするらしいが……。

「ああ…まあ何と言うか…スキルアウトつつつても色々あるんでね」

俺はどのタイプにも当てはまらない。夢を見るのを辞め、追うほどの夢を持たず、だからこそ潰されず、けれども羨む事もない。

「俺はどこにも行けずにフラフラしてるだけだからさ」

別に能力者を目の敵にしてるワケじゃない。スキルアウトの大部分はそつらしいが俺には関係ない。てかウチのメンツに能力者居るしな。

「ハッ！なんだそ……………あん？」

突然アラームが鳴り響く。それは一方通行の携帯からだ。一方通行は気だるそうに緩慢な動きで携帯を取り出しアラームを止めた。

「…チッ」

一方通行は席を立つと真っ直ぐ店の出口へと歩を進め……と言っ  
か。

「あ、オイ、一方通行どこに………行っちゃまいやがったよオ  
イ」

一方通行は俺の呼びかけをガン無視して店から出て行った。行きや  
がった。

「……………どーすっかなあ…コレ」

テーブルに視線を戻す。そこには殆ど手を付けていない数人前の肉  
や野菜が残されている。ハッキリ言おう。一人じゃ処理できねえ。

「ヤレヤレ…アイツ等呼ぶか……………」

俺は携帯を取り出し、いつものメンツにメールを一斉送信する。内  
容はとても簡潔。

《肉食いたいヤツは来い。》

コレだけだ。場所はGPSを使えば一発だろうから必要ないしな。  
今日は働いたヤツも居るからそれを労ってやるのもいいかな。

「……………しかし、今日1日で結構な出費だなあ……………」

ワリカンにすっかなあ……………ハア。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5503k/>

---

とある無能の絶対回避(リターナー)

2010年12月12日19時22分発行